

特257

35

俗通

書道入門

漢字之部上



始



特257
35

吉岡呂峰先生編書



書道入門

漢字之部

上卷



東京續文堂

聖諭

從五位吉岡熊雄薰沐謹書

朕惟我

皇祖

皇宗肇國宏遠樹德深厚
我臣民克忠克孝億兆一
心世濟厥美是我國體之
精華而教育之淵源亦實

存于此矣爾臣民孝于父
母友于兄弟夫婦相和朋
友相信恭儉持己博愛及
衆修學習業以啓發知能
成就德器廣公益開世務
重國憲遵國法一旦緩急
則義勇奉公可以扶翼天
壤無窮之皇運矣果能如
此則非獨爲朕忠良之臣
民亦足以顯彰爾祖先之
遺風斯道也實我
皇祖

皇宗之遺訓子孫臣民所
當俱遵守焉通諸古今而
不謬施諸中外不悖朕與
爾臣民偕拳拳服膺庶幾
咸一其德矣

明治天皇御筆

皇宗之遺訓

子孫臣民所當

俱遵守焉

通諸古今而不謬

施諸中外不悖朕與

爾

明治天皇御製

しんまつあはれ
らこわもそはら

ふきあはら

ふたなほし
ちかたはら
あはら

緒言

余は書道専門家にあらず唯書道奨励家たらむことを努むるのみ。

余魯鈍にして百事拙就中書に於て最も拙也然れども常に之れが學習の念絶えず往年偶々國の先輩三島中州翁を訪ふて精神修養の道を聞くに翁曰く書道に精進せよ然らば心平らかに氣靜かに一旦筆硯に向ふ時は沈着閑雅の人となり無我無念恰も聖賢の道を行くが如く知らず識らずの間に書道の妙技を得るに至らんとこゝに大に悟る所あり爾後斯道の先輩について法を質し古法帖に依て道を探りたり然れども素より惡筆其妙を得るに到らずと雖能く書道の趣味を知り復た用を達するに足れり。

然るに余は教育界に三十年官界實業界に十餘年而かも劇務にあり書を樂むの暇なく剩さへ毛筆を手にするこゝさへ尠かりき先年老齡職を辭し多年公職にあり其間多くの人々の最も必要にして最も苦しめるものは惡筆の惱みに在ることを見聞せり今や幸に閑地にあり而かも身體強健にして尙活動の餘力を存す依て専ら心を書道奨励に致さんと欲し初學者をして容易に學習し得る最

も簡易に一舉にして読み書き意義を諒得し得る通俗的の書冊を著はさんとし
て遂に茲に本書を公にするに至る僅々數週間の拙作素より亂暴杜撰見るべき
ものなしと雖初學者之れによりて書道に入るの端を啓くを得ば幸甚。

昭和甲戌晚秋

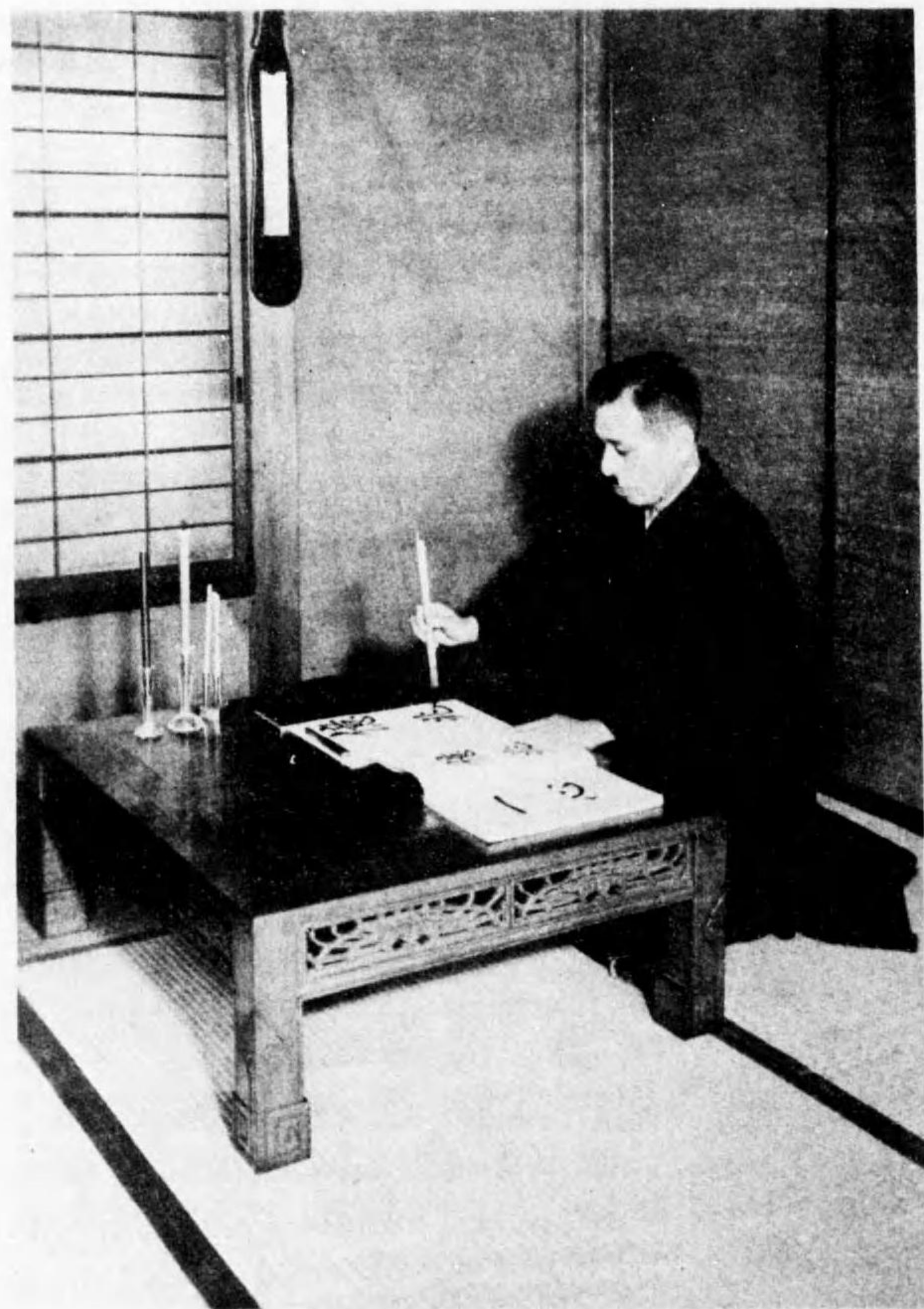
九段坂上臥牛書院に於て

著者識るす

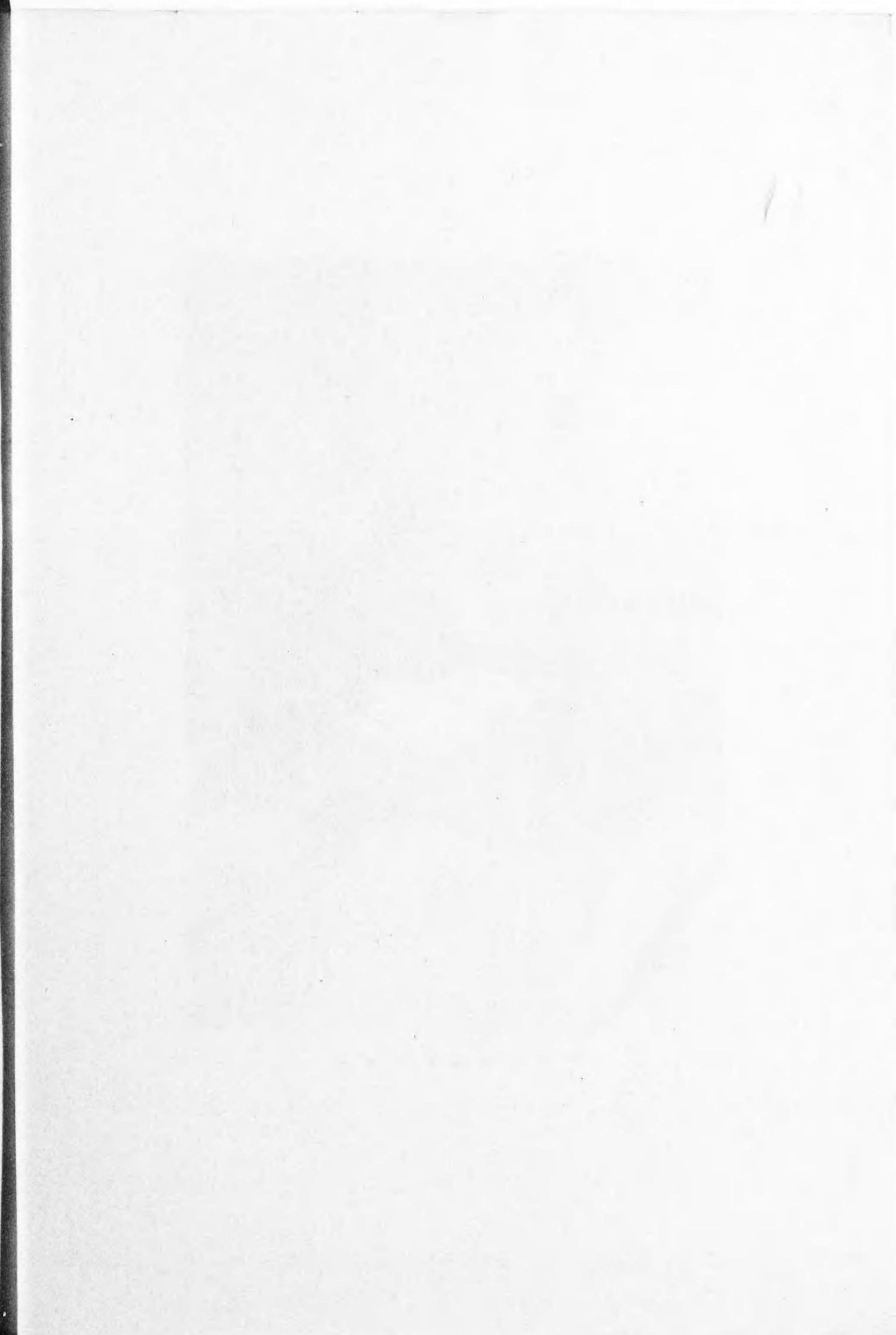
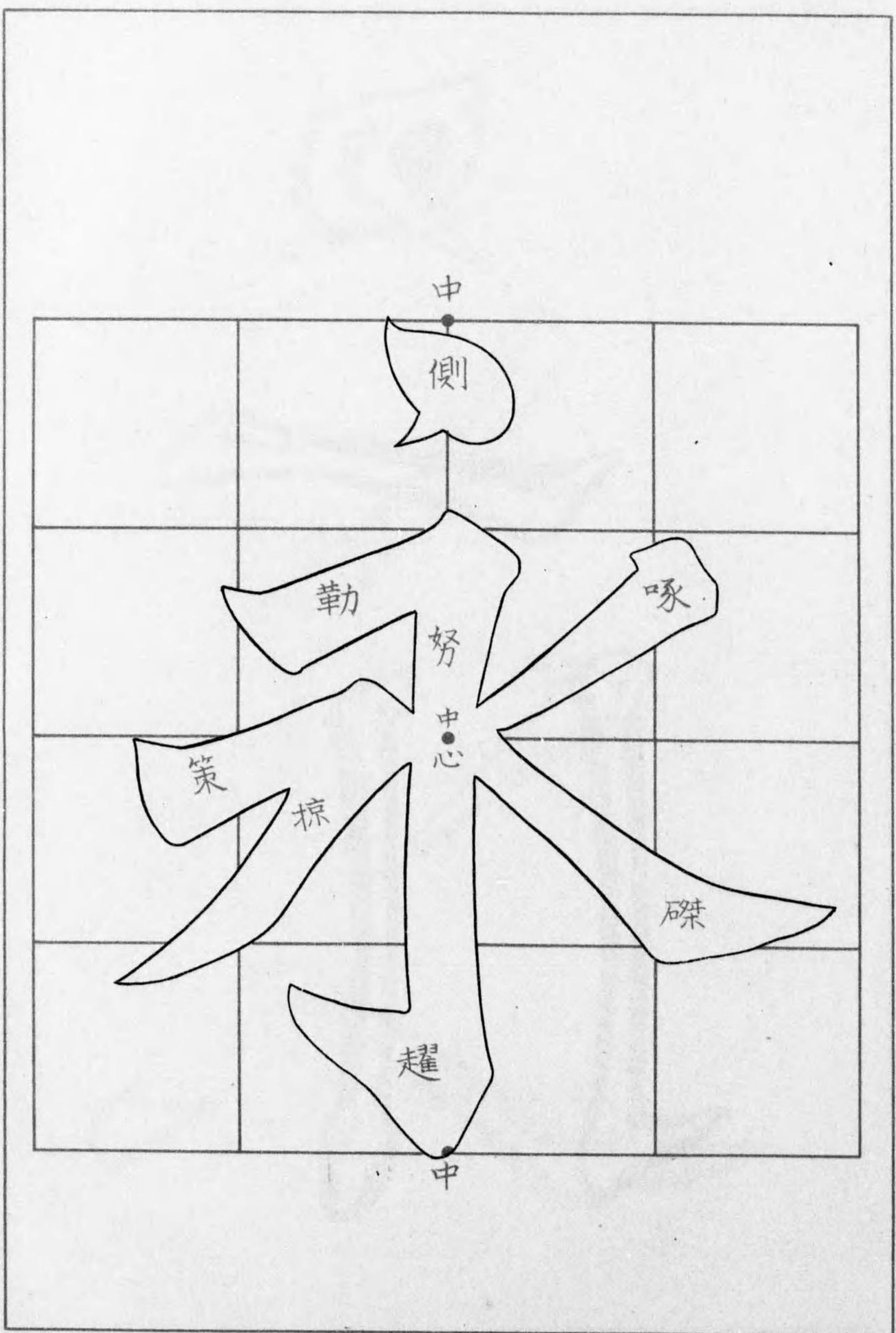
目次 上卷

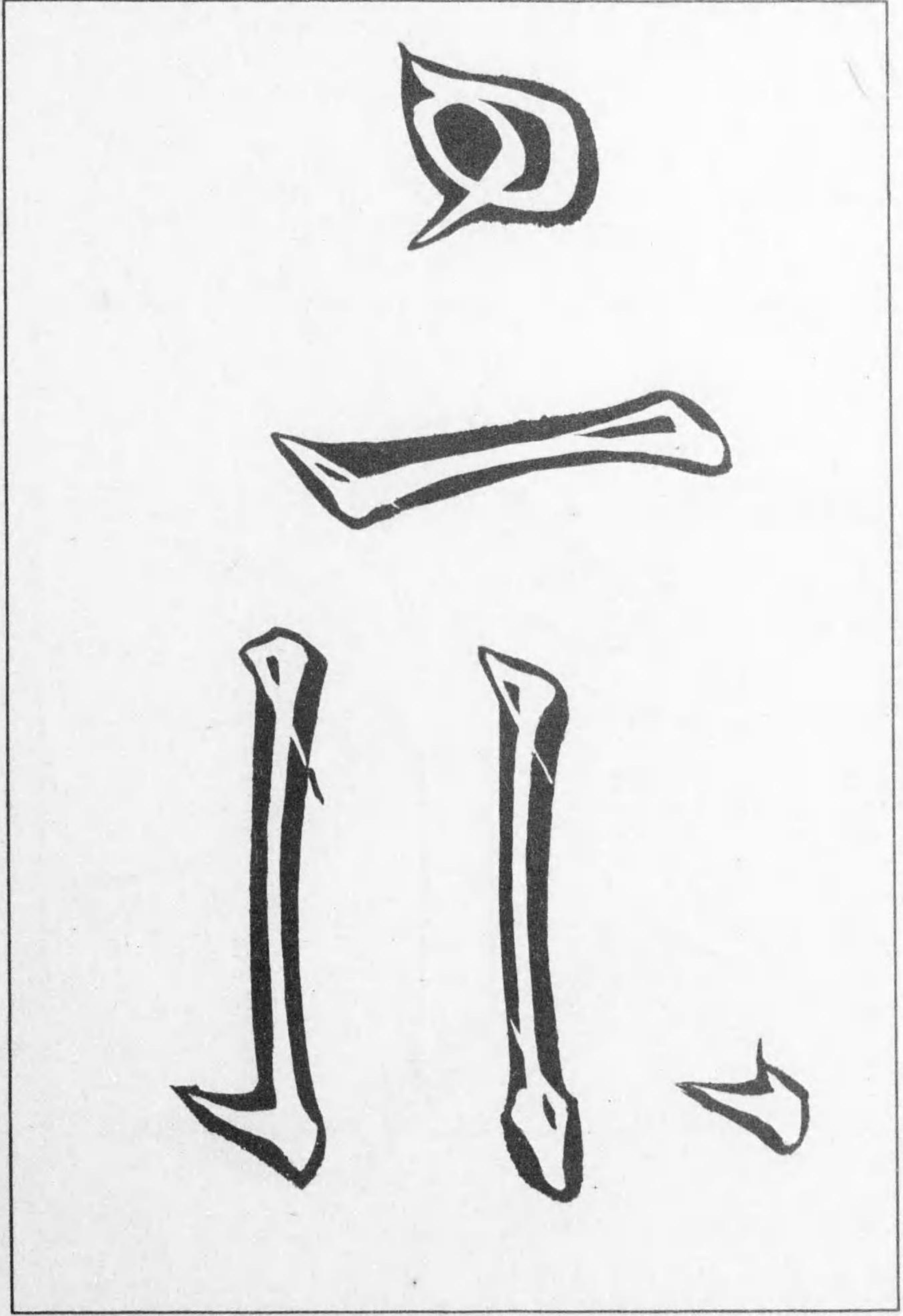
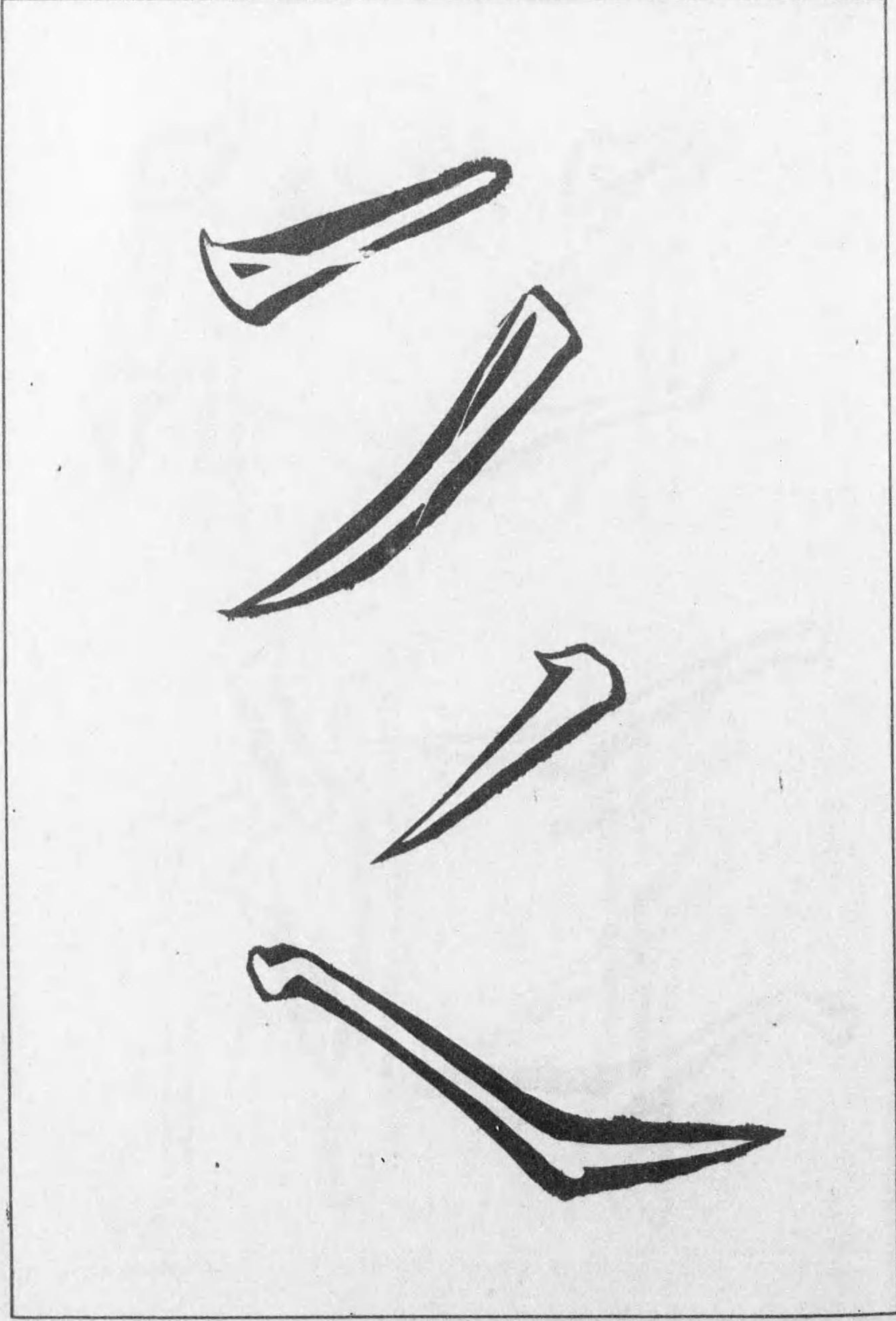
漢文之部

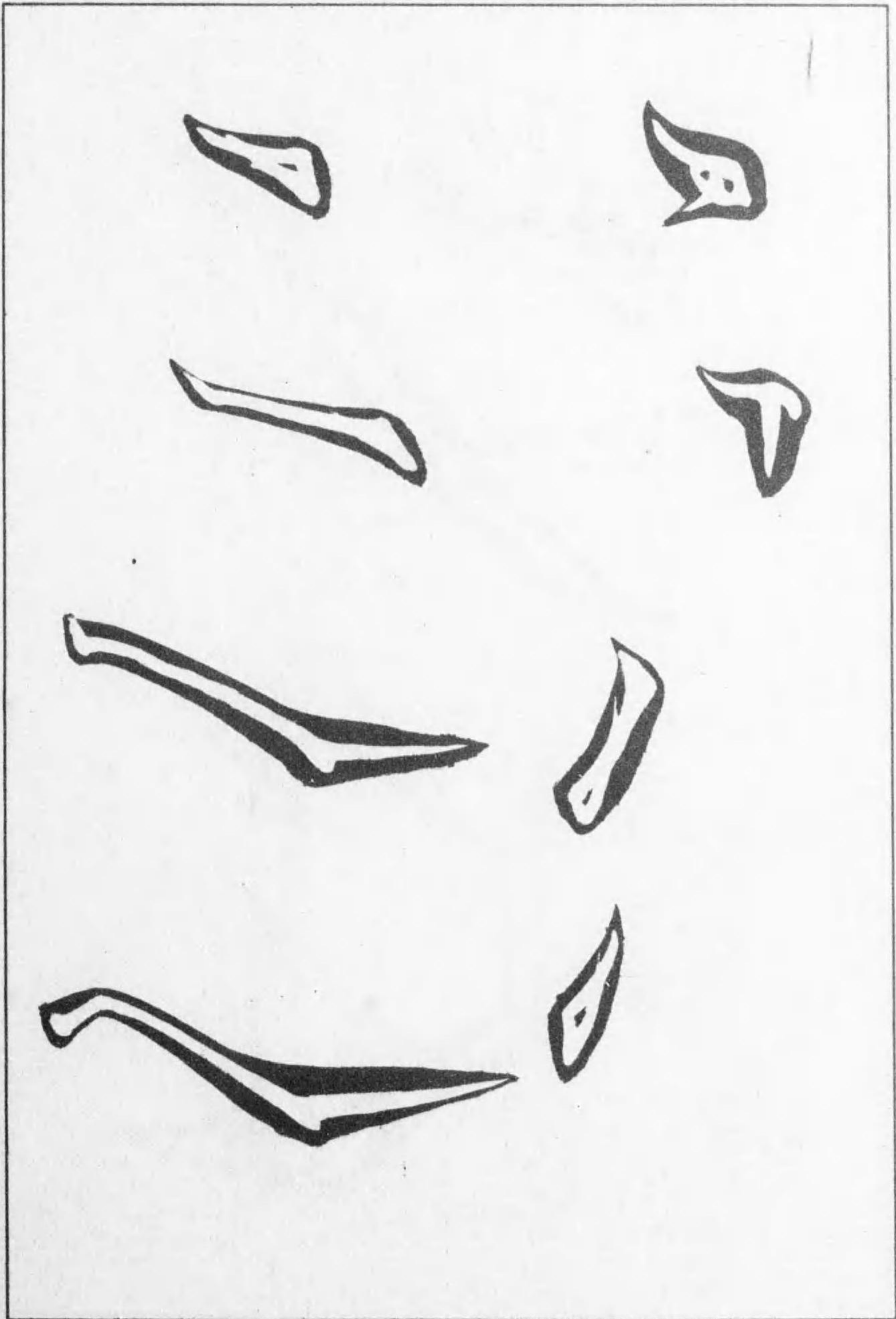
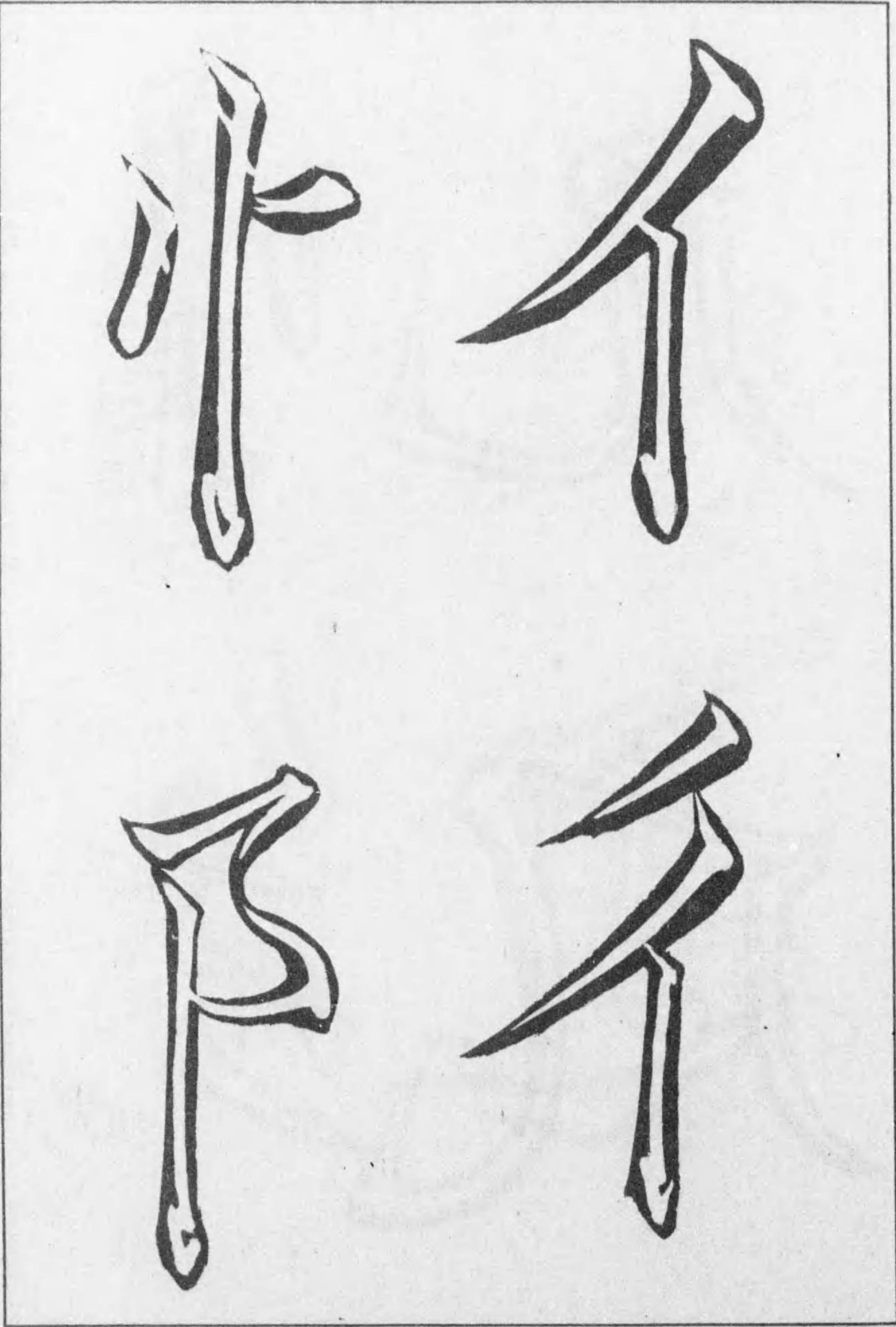
一、執筆法寫眞……………	一
二、永字八法(附筆意)……………	一
三、楷書學習上の心得……………	一三
四、運筆の順序……………	一五
五、楷書(附くづし字竝讀方)……………	一七
六、細楷(履歴書受領預證入會缺席屆)……………	四三
七、行書學習上の心得……………	四九
八、行書基本點畫……………	五一
九、行書附同字眞書竝讀方……………	五三
一〇、細行(目錄書方)……………	七一
一一、草書學習上の心得……………	七三
一二、草書(附同字眞書竝讀方意義)……………	七五
一三、難字くづし……………	一一



法筆執錦雙生先峰呂







凡 川
凡 川

鳥 言
馬 家

字

寒 富

家 女

为 夕



遠 進



温 治

楷書學習上の心得

學書の心得を述ぶるに當り先づ書の本體を一言して置く必要がある著者は書を以て精神修養の一技となし徳を修め道を悟るには書を學ぶを以て最善の道として居る即ち書を學び之れを味ふて進むときは心は平靜圓和を得べく氣は高雅純潔に向ひ隨て身體は健康となり氣宇宏量大思の人となるので古人も心正しければ則ち筆正しといへる如く一度端正筆を持つときは趣味津々と湧き出て其樂み言ふ可からざるものがある故に書道を修めんとするには武士道と同じく大和魂を養ひ氣高き心を培ふ考へてやるが善いと思ふ。

先づ書を學ぶ初步としては楷書を先きにするが楷書は各書體の基本となるものなれば最もよく力を注ぎ一點一畫忽にしてはならぬ又楷書は其運筆法に注意すると共に其結構法にも十分注意して文字の結體を整へなければならぬ。

一、姿勢を正しくし坐する時は端坐し椅子に掛けるときは椅子を少し後ろに引き淺く腰を掛けること

二、楷書の運筆に於ては筆の表裏を正しくして起筆終筆を精妙にしなければならぬ

三、楷書の各點畫は上下左右相照應して互に其氣脈を通し而して其距離間隔を齊しくすること

- 四、運筆順序を誤らぬやう注意すること
- 五、楷書に於ては多くの文字を書き連ぬる場合は文字の大小をよく揃へなくてはならぬ
- 六、要するに一點一畫に精神をうちこんで其文字が恰も生けるが如く力あること

運筆の順序

文字を書くには必ず先づ其運筆の順序を正しく研究する必要がある。運筆の順序が正しければ文字の結構がよく整ひ字體がよく統一されて安定となり、書寫も敏速になる。其書體の順序は字源によるものと、運筆の都合によるものと二種あるが如し、今左に其最も判り難きものゝ例を示して参考となさむ。

- 一、上より下に及ぼすこと
- 二、左より右に及ぼすこと
- 三、中央を先にし左右を後にすること
- 四、主なる部を先にし副部を後にすること
- 五、縦畫が横畫を貫く場合は横畫を先にし縦畫を後にす
- 六、外圍より内部に及ぼすこと
- 七、草書の筆順によること
- 八、筆勢を利用して次の畫に移ること

承 了 了 三 フ 七	歲 ト 上 ノ 步 入 ノ	齋 守 カ ハ 示 ハ	無 三 四 ハ ニ 三 六	成 ノ 一 フ 入 ノ	必 ノ 入 ノ	佳 イ ノ 三 一	上 ノ 一	例
率 一 五 以 十	鼎 目 川 ケ キ	聚 取 イ ケ キ	耳 下 三 一	來 一 从 人	門 ノ 一 三 一 以 二	長 一 三 一 以	方 ノ 一 ノ	
卵 レ ノ 一 口	馬 目 ノ ハ	草 ノ 一 早	興 同 目 ヨ 一 ハ	飛 飛 一 リ 飛	非 川 シ 三	出 一 ノ ハ ハ	凸 口 ノ 一	

君 道 義
臣 道 忠

君きみの道みちは義ぎ
臣しんの道みちは忠ちゆう
君 道 義 五 乃 九

一統天下
一統天下

一統天下
平の世

一統天下
一統天下

治天下
天下
治天下
治天下

天下を治むる
當に私無かるべし。

治天下
治天下

正其其心
養其其性

其心を正しうして
其性を養ふ。
正其其性

幼而學
壯而行

幼にして學び
壯にして行ふ。
幼る學壯而行

交 以 道
接 以 禮

まじは
交るに道^{みち}を以て
接するに禮^{れい}を以てす。
才^{さい}以^{もつ}道^{みち}接^{せつ}い^い禮^{れい}

德 如 海
壽 似 山

徳は海^{うみ}の如^{ごとく}く
壽^{いゆ}は山^{やま}に似^にたり。
徳^{とく}如^{ごとく}海^{うみ}壽^{いゆ}似^に山^{やま}

樂 其 生
保 其 壽

其^{その}生^{せい}を^を樂^{たのし}み
其^{その}壽^{じゆ}を^を保^{たも}つ。
其^其生^生を^を樂^樂み
其^其生^生を^を保^保つ。

文 而 真
學 且 勤

文^{ぶん}に^にして^{して}真^{しん}。
學^{まな}び^び且^{かつ}つ^つ勤^{つと}む。
文^文を^を學^學ぶ^ぶは^は勤^勤む。
文^文を^を學^學ぶ^ぶは^は勤^勤む。

力 於 始
遂 其 終

始 はじめ を つと 力 ちから む。
其 その 終 きはり を つと 遂 と ぐ。
力 ちから 於 お 始 はじめ 遂 と を つと 終 きはり ぐ。

雨 時 潤 山
色 潤 時 健

雨 あめ 時 とき を うるほ 潤 うるほ す。
山 さん 色 しよく 健 けん なり。
る 潤 うるほ 時 とき 山 さん 色 しよく 健 けん 。

草木榮
天下春

草木榮さかの春はる。天下てんかの春はる。

和風喜
氣相隨

和風喜わふうき氣相隨きあいにしたがふ。和風喜氣相隨。

仰觀
俯聽
山泉

仰あふて山やまを觀み。
俯くだりて泉いづみを聽きく。
仰觀山俯聽泉。

日長庭
清虛

日ひ長ながく庭てい。
清せい虚きょ。
日長庭清虛。

明月照
雲籠

明月照
雲籠
白雲籠
明月照
竹籠

飛
仁
風
以
樹
惠

仁風以樹
以樹
仁風以樹
仁風以樹
仁風以樹
仁風以樹
仁風以樹
仁風以樹
仁風以樹
仁風以樹

清 如 水
平 衡 如 女

清は水の如く
平は衡の如し
清如水
平如女

詠 高 梧
賦 修 竹

高梧を詠じ
修竹を賦す
詠高梧
賦修竹

一池雲
錦清閑

一池の雲
錦清閑

一池雲錦清閑

蓮曉風池
香風池
度

蓮曉風池
香風池
度

曉風池蓮香度

素 雪 紛
鶴 委 紛

素 雪 紛
素 雪 紛
素 雪 紛
素 雪 紛

夜 靜 寒
巖 虎 嘯

夜 靜 寒
巖 虎 嘯
夜 靜 寒
巖 虎 嘯

月落鳥啼
夜寒

月落鳥啼
夜寒

四三
四二

履歷書

原籍 京都市左京區修學院町一番地
現住地 京都市神田區五軒町六番地

戸主 吉太郎次男

武田吉雄

大正五年十二月八日生

學業

一 大正十二年四月一日 京都市立小川尋常小學校入學
一 昭和四年三月二十八日 同校卒業
一 今 四年四月一日 東京府立第二商業學校入學

一 今九年三月三十日 同校卒業

賞 罰

無シ

業 務

無シ

身分異動

無シ

右之通り相違無之候也

昭和九年十一月十五日

右 武田吉雄印

四四

四五

收入
紙印

受領證

一金四百七拾五圓也

但シ玄米四斗八五拾俵代金

右正ニ受取申候也

昭和九年十二月五日

良田米造印

酒井金藏殿

收 入
印 紙

預り證

一金壹萬圓也

但シ國庫債券百圓券壹百枚

右貴殿御旅行中慥ニ御預り申候也

昭和九年十月二十五日

石部金吉印

大原正剛殿

入會申込書

私儀貴會ノ主旨ニ賛シ入會致シ度御規
定ニヨリ學歷書相添へ此段申込候也

昭和九年十月十五日

函館市湯川町十五番地

藤田岩之助

東京市麹町區九段三丁目二番地

書道研究會御中

缺席届

私儀本日總會ニ出席聊カ害虫豫防ニ付研究ノ愚説發表致スベク申込置候處昨夜ヨリ腹痛烈シク今朝ニ至リ尚ホ發熱高ク止ムラ得ス缺席致候條會員諸君ニモ然ルヘク御取計ラヒ下サレ度願上候

右御届申上候也

昭和九年十一月三日

高山 登

岡山縣兒島郡

青年團長山本 巖殿

行書學習上の心得

行書は楷書と異り書き易く又實用書として最も珍重せられるが爲め汎く一般に行はれる様になつたから之れを行書と名づけられたのだと傳へてゐる

行書は楷書に比ぶれば點畫の連續變化が多く、隨て點畫上一定の法則がない左に心得べき點二三を示さん

一、行書は楷書と草書との中間にあるもので字體は温容を貴ぶが故に筆をなよらかに運ぶこと
二、行書は點畫の省略多く又連續、方向轉換の所はゆつくりとすれども直線は速かに運ぶこと

三、行書は曲折して居る所でも餘り角立たぬやうに書かねばならぬ

四、概して楷書の如く謹嚴端正でなく率直自由で情勢を主とするが故に其點多少獨自の點あるが大體楷書に準じて研究すればよい

模書と臨書

模書は透き寫しすること、臨書は見て書くこと、何れも習字には必要であるが亦何れにも多少の缺點を有するのである。模書は形を學ぶには便利で誠によい方法であるが筆力を養ふには適せない、即ち透き寫す故文字に精氣即ち生々した氣力がなく寫眞の如きもので其形は毫も違はないが實物と較ぶれば、どことなく別物の感じがするから餘り模寫のみ多くすると一向自主的生氣なく死物の如くなる又臨書は力を得るには適すれども形を似せるに便利でないから往々にして實物と形體の違つた文字が現はれる故に模寫によつて其形體を研究し次に臨書によつて一點一畫に細心の注意を拂つて生氣ある文字を書くことに努むべきである。

行書基本點畫



一 二 三 四 五
 六 七 八 九 十
 十一 十二 十三 十四 十五
 十六 十七 十八 十九 二十

肇 國 宏
 遠 樹 德

國クニヲ肇ハジムコト宏コウ
 遠エンニ德トクヲ樹タツルコト
 肇國宏遠樹德

深 厚 地 一 心 億

深^{シシ}厚^{コウ}ナリ。億^{オウ} 深^{シシ}厚^{コウ}ナリ。億^{オウ}
兆^{キョウ}心^{シン}ヲ一^{イツ}ニシテ。

美 世 國 濟 其 體

世^ヨノ^ヨ 厥^{ケル} 美^ビヲ^ヲ 濟^{セイ} 世^ヨノ^ヨ 滴^ツ 厥^{ケル} 美^ビ 國^{クニ} 體^{タイ}
セルハ。 國^{クニ} 體^{タイ}、 世^ヨノ^ヨ 滴^ツ 厥^{ケル} 美^ビ 國^{クニ} 體^{タイ}

精 華 教
育 淵 源

精^{セイ} 華^{クワ}
育^{イク} 淵^{エン} 源^{ゲン}

教^{キョウ}
精^{セイ} 華^{クワ} 教^{キョウ} 育^{イク} 淵^{エン} 源^{ゲン}

孝 友
父 友
母 弟

父^フ 母^ボ
兄^{ケイ} 弟^{テイ}
友^{ユウ} 友^{ユウ}
孝^{カウ} 孝^{カウ}
友^{ユウ} 友^{ユウ}

孝^{カウ} 父^フ 女^メ 友^{ユウ} 兄^{ケイ} 弟^{テイ}

夫和 婦和 相和 朋友
夫和 婦和 相和 朋友
夫和 婦和 相和 朋友
夫和 婦和 相和 朋友

夫和 婦和 相和 朋友

夫和 婦和 相和 朋友

相信 相信 相信 相信
相信 相信 相信 相信
相信 相信 相信 相信
相信 相信 相信 相信

相信 相信 相信 相信

相信 相信 相信 相信

相信 相信 相信 相信

相信 相信 相信 相信

相信 相信 相信 相信

相信 相信 相信 相信

博 衆 博 愛 及
修 學 及

博^{ハク}愛^{アイ}衆^{シユウ}ニ
及^{オヨ}ボシ^シ。 學^{ガク}子^クヲ 修^{オサ}メ
博^{ハク}愛^{アイ}衆^{シユウ}ニ
修^{オサ}メ 及^{オヨ}ボシ^シ。

智 業 啓
知 能

業^{ゲウ}ヲ 習^{ナラ}ヒ。 知^チ能^{ノウ}
啓^{ケイ}業^{ハク}ヲ 啓^シ。
智^チ業^{ゲウ}ヲ 啓^シ。 友^{トモ}知^チ能^{ノウ}

成就德
器廣公

徳器ヲ成就シ
公益ヲ廣メ
來能法其廣公

益開世
務重國

世務ヲ開キ
國憲ヲ重シ
益再世務重國

憲 遵 國
法 一 旦

コクホウニシカ
一ツタン
國法ニ遵ヒ

憲遵國法一旦

緩 急 則
義 勇 奉 則

クワキキ
義 緩 急 アレバ 則チ
マウコウホウニ奉シ

緩急之出義勇奉

公 天 壤
 無 窮 之
テシジョウムキエウ
 天 壤 無 窮 之
云云

皇 運 祖 先 之 彰
 祖 先 之 彰
コウウンソウセン
 皇 運 祖 先 之
フウヲ
 遺 風 彰 之
アスハ
 彰 之

遺風通 諸古今

諸ヲ古今ニ遺風通法古今
通ツウジテ

而 不 認 施 諸 中

中 認 外 施 而 不 深 極 法 中
中ニウケラズ諸レヲ
外ニホトシテ

外天悖
一其德悖

悖^{モト}ラズ^の。おふ悖一^{其ノ徳ヲ一ニス。}其ノ徳ヲ一ニス。

目錄

- 一 袴 壹 具
- 一 勝男武士 壹 連
- 一 壽留女 壹 臺
- 一 子生婦 壹 臺
- 一 友志良賀 壹 臺

一家内喜多留

壹 荷

一末 廣

壹 對

右之通り幾久敷御受納
下さるべく候以上

昭和九年九月吉日

鶴岡千代松

亀谷萬藏殿

草書學習上の心得

草書は時代の進歩と共に時間の經濟上敏速に書く必要から自然に發達したものだといつて居るが草書を學習するには決して早く書くといふことを頭に置いてはならぬ。勿論點畫は簡略であり用筆法も楷書の如く嚴格でなく省略されて居るから楷書の運筆よりは多少早いのであるけれども之れを走筆するのは間違である。左に注意すべき點を擧ぐれば

一、草書は行書よりも著しく圓味も柔か味も流暢味もあり最も變化が多いから文字の釣合に注意しなければならぬ

二、草書は大いに點畫が省略されてゐるから誤らぬやうに注意しなければならぬ

三、草書の運筆は行書よりも速いのが普通であるが餘り早過ぎて沈着を缺き輕卒浮滑に流れてはならぬ

四、草書は點畫と點畫との連結、扁と旁との連續、文字と文字との連綿をよく注意しなくてはならぬ

五、草書には扁や旁の崩し方に類似のものが多から誤らぬ様に注意しなければならぬ

六、草書には數字連綿する場合には大小長短等程よく調和して書くことが最も必要である

七、草書の用筆は楷行よりも深くつかふこと

千字文
字

草書
字

草体にくづいた千字文

天地玄
黃字宇宙

天^ラ地^ニ玄^ケン
黄^ク宇^ヲ宙^ヲ

天の色は玄即ち黒く、地の色は黄乃ち
黄^キ、
宇宙とは大空乃ち天と地の間をいふ。

洪荒乃日
有盈乃辰

洪^カウ荒^ウ乃日^ジツ
月^ゲツ盈^エ乃辰^シヲ

荒洪とは共に大にして廣きをいふ。
日は盈乃ち満つれば西に傾き月出つれば辰乃ち
かぐ。

辰宿列張
辰は天の十二宮、宿とは二十八宿にして共に星の座なり。列張とは日月と共に天に列る、寒來は寒さが来る、

辰シシ 宿シシ 列シシ
張キ 寒カシ 來ライ

暑往秋收
暑さが来れば、暑が往くは去ること。秋がくれば五穀をとり入れ收め、冬がくれば之を蔵し納めること。

暑シヨ 往ワウ 秋シウ
收ウシユ 冬トウ 蔵ゾウ

暑さが来れば、暑が往くは去ること。秋がくれば五穀をとり入れ收め、冬がくれば之を蔵し納めること。

玉 解 成
律 呂 成

閏^レ餘^ヨ成^{セイ}
歲^{サイ}律^{リツ}呂^{リョ}

閏餘歲を成しとは四年に一度は閏月を
たきて歳を定め、
律呂とは音楽のこい。

調 子
陽 雲
騰 致 雨

調^{テウ}陽^{ヤウ}雲^{ウン}
騰^{トウ}致^チ雨^ウ

調陽は音楽の調子、これと氣節に配して
陰陽の氣を調へるなり、
地上の水氣立ち騰^{トウ}りて雲となり、雲冷氣に逢ひて雨^ウと致^チす

露結 爲
 霜生 爲

露^{ツキ}口^{ムスデ} 結^{ケツ} 爲^キ
 霜^{シロ}ソウ 金^{キン} 生^{セイ}

露結ぼりて霜と爲り、
 支那にて麗水と名けし河より金を出した。

出 麗 水 玉
 崑崙 崑崙 崑崙

麗^{レイ}水^{スイ} 玉^{ギョク}
 出^{イッ}シテ 崑^{コン} 崑^{コン} 崑^{コン} 岡^{カウ}

金は麗水より生じ、又崑崙と称する山中
 より水晶、琥珀、宝玉を出せり。

劍 寶
珠 珠
稱 稱

趙の國の名劍は巨闕と銘せり。
珠ハ夜光と稱す。

寶劍 珠珠 稱稱

劍ツルギケシ
號ナヅケケウ
巨オホキキ

趙の國の名劍は巨闕と銘せり。
珠ハ夜光と稱す。

夜ヨヤ 光ヒカリウツワ 菓クワクワ
珍メダカニシ 李リリ 柰ナイタイ

珠タマを夜光と稱ふ。
果ミカは李スモモニシ 柰ナシを珍メダカとす。

珠 光 菓
李 柰

夜ヨヤ 光ヒカリウツワ 菓クワクワ
珍メダカニシ 李リリ 柰ナイタイ

珠タマを夜光と稱ふ。
果ミカは李スモモニシ 柰ナシを珍メダカとす。

菜 菜
菜 菜
菜 菜
菜 菜

菜^ナ サイ 重^{オモシ} 重^{オモシ} 芥^{カイ} 芥^{カイ}
薑^{シヤウ} 薑^{シヤウ} 海^{カイ} 海^{カイ} 鹹^{ケン} 鹹^{ケン}

野菜も種々多けれど、支那では芥と薑を第一とす。海の水は鹹く。

河 河
河 河
河 河
河 河

河^カ カ 淡^{タン} 淡^{タン} 鱗^{リン} 鱗^{リン}
潜^{ヒソカニ} 潜^{ヒソカニ} 羽^{ハネ} 羽^{ハネ} 翔^{カケル} 翔^{カケル}

海の水は鹹くて河の水は淡くて鹽氣を含まず。鱗乃ち魚は水に潜みてすみ、羽乃ち鳥は空中を翔る

龍師 帝

龍リヤウ師シ火クワ
帝テイ鳥ウ官カン

支那の上古伏羲氏の時龍馬圖を負つて出づ因つて伏羲氏を龍師といひ、燧人氏は民に火食を教へしより火帝と稱す。鳥官は昊氏の時の官名、

人皇 始 制 文 字

人ジン皇ウ始シ
制サイ文モン字ジ

人皇とは天皇、地皇、人皇の人皇氏をいふ、上古には文字なく繩を結んで約束又ハ志をいせしが蒼頡といふ人文字を制作次第に進みて、

乃^{スナハチ}多^ク服^ス衣^イ
裳^{シヤウ}推^ス位^イ井^キ

乃^ノち衣裳^{イサウ}を作りて之^ノを服^クするに至^リ礼^レり。
だん^ニ世^ノの進むにつれ道德^{トクデク}を重^クんじ聖^{セウ}人^{ジン}
出^デて位^イを推^シす。

乃 裳 推 位 井

讓^{ユウ}國^{クニ}有^リ虞^ウ
唐^{テイ}陶^{トウ}

國^{クニ}を讓^{ユウ}りて世^ノを治^メめ乃^チ帝^{テイ}堯^{ギョウ}陶^{トウ}唐^{テイ}氏^シは舜^{シン}
と推^シして位^イに即^シか^シめ帝^{テイ}舜^{シン}有^リ虞^ウ氏^シは禹^ウと
擧^ケげて國^{クニ}を讓^{ユウ}られた。

漢 國 有 唐 陶

市 民 伐
飛 周 友 伐

罪ツミ 周シウ 發ハツ
吊トウ 民ミン 伐バツ

吊とは恤れみ慰むるを、暴虐な君を誅伐して人民を苦しみより救ひ、周の武王發は殷の讎王を伐ち

殷 湯 坐
朝 問 道
殷 湯 坐
朝 問 道

殷イン 湯トウ 坐ザ
朝チウ 問モン 道ドウ

殷の湯王は暴君夏王桀を誅し聖賢なる人君は朝廷に坐して天下國家を治むるの道を臣下に問ひ諮りて政を行ふ。

垂拱而治
字書之育

無スイ 拱キヤウ 平ヘイ
章シヤウ 愛イ 育イク

衣を無^カれ手^ヲを拱^{コウキキ}きて天下は自ら平らかに
章^{シヤウ}らかに治^シまれり。
仁君世を^ニ知^チしめ^ルて萬民を^{マン}愛^イし^ル育^{イク}み^ヲ給^キふ。

黎黎 戎先
伏 戎 先

黎^{レイ}首^{シユ}シ^シ臣^シシ
伏^{フツ}フ 戎^ウウ 先^{セン}セン

黎首とは蒼生萬民のこと、
戎先として西方の遠きエビスの國々までも其徳
を慕ひ来りて臣下となりて伏従せむと云ふ。

遐カ 邇ジ 壹イッ
體タイ 率ソフ 賓ヒン

遐とは遠きをいひ、邇とは近きをいふ、仁君の徳化は遠近の別なく壹體に及ぶをいふ。

遐邇 率賓 壹體

鳳鳴 在樹 王在 樹

歸キ 王ヲウ 鳴イ
鳳ホウ 在カイ 樹ジエ

率土の賓即ち國土の果てまでも王化に歸伏す、天下大平の瑞兆として鳳凰は来りて木にやどりて鳴き。

白駒食
白駒食
被化

白ハク駒ク食シヨク
場シヨク化クワ被ヒ

白キ駒は出で、牧場に食む乃ち徳の禽
獸まで及べること
化は草木に被ほし

草木
及キフ 萬バン方ハク
其の恵みの露は草木にも被り、其のさいは
ひは引けて宇宙の萬物にまで及ぼせんとす

草サウ 木モク 頼ニイ
及キフ 萬バン方ハク

其の恵みの露は草木にも被り、其のさいは
ひは引けて宇宙の萬物にまで及ぼせんとす

髮 身 此 乃
 四 此 乃
 大 乃

蓋 カイ 此 シ 身 シン
 髮 ハツ 四 シ 大 ダイ

蓋 ケシ 此の身髮即ち身体髮膚は思ふに
 父母より受けたるものなれども四大即ち地、
 水、火、風の陰陽の和合より成りて天地を象れる也。

性 子 乃 其
 教 養 是 也

五 ゴ 常 ジョウ 恭 キョウ
 惟 ヒ 鞠 キク 養 ヤウ

五常乃ち仁、義、禮、智、信、の道を守るべきなり
 されど恭ツツシみて鞠マツ養ヤウ即ち父母が此身をはぐマシみ養ヤウ
 へ給ひて大恩を惟ヒへば

豈に敢て毀キ
 傷シヤ女ゾ慕ホ
 備女慕
 豈に敢て傷キ毀ラんヤ(身体髮膚敢て毀傷セヨ孝の道
 女乃ちすべての婦人は貞操と潔白との行ひを慕ひて苟も
 これに背かざらんことを期すべし

貞潔ケツ 男ゲン
 女慕ニ貞潔
 男は才能と善良とを手本として、これをならひ、思し
 き行ひたうらんことを戒しめたり。

取らざる能ひ

知千過多必ヒツ
改カイ得トク能ハ

凡ソ人トシテは必ず過^{アヤシキ}ヲキキ^{トク}ヲ保^ホセズ、
されば若し過を知りたる時は速かに之れを改むべし、
又能とは人の必を行ふべき道^{ミチ}也。

莫忘罔咎
淡彼短

莫^{ナシ}バク忘^{ワスレ}バウ罔^{コト}ハウ
談^{カシ}ダン彼^{カレ}ヒ短^{ミダシ}タン

人の行ふべき道を得たならし忘る、莫^{ナシ}礼、
彼の短^{ミダシ}を談^{カシ}する罔^{コト}礼

靡 恃 已
長 信 使

靡 恃 已
長 信 使

靡ビ 恃ジ 己コ
長ウチヤ 信シシ 使シ

オレ 己ノ長ヲ 恃ル 靡ル
信トハ 眞實ナリ

の 覆 器
各 難 量

可カ 覆フ 器キ
欲ヨク 難ナン 量ウリヤ

一旦人と約束したら必ず実行すべきこと。
信使可覆。器とは器量のことなり、己れの器量他から
見ずかされてはならぬ。

墨 墨 出 弱
後 詩 世 貴

墨ボク 悲ヒ 縁シ
染セン 詩シ 讚サン

墨ボク 悲ヒ 縁シ
墨士子といへる賢人は白き糸が種々なり色に染るを見て悲めり。
詩の羔羊篇は周の文王の徳を賞讃せり。

羔 羊 景
行 維 賢

羔カウ 羊ヨウ 景ケイ
行ウウ 維キ 賢ケン

羔羊は詩の篇名、
景とは大なり、明なり、
大きく明らかたる人は
維礼賢人であり

剋
 念
 作
 聖
 德
 建
 一
 聖
 德
 建

剋コク 念ネン 作サク
 聖セイ 德トク 建ケン

又よく古への聖人の行いを念オモふて忘れざれば
 また聖人ごなるを得べし。
 徳建ちて而して後名立つ。

110
111

難字くづー
 上
 下
 世
 兼
 亦
 亂
 事
 交
 儉
 兩
 其
 兼

上
 下
 世
 兼
 亦
 亂
 事
 交
 儉
 兩
 其
 兼

城	差	善
城	差	善
堂	意	喜
堂	意	喜
堯	嚴	喬
堯	嚴	喬
報	垂	單
報	垂	單

叙	則	冠
叙	則	冠
叢	前	刑
叢	前	刑
命	動	判
命	動	判
哉	務	別
哉	務	別

一一三

一一三

歡	最	數
彩	石	瓦
歲	樂	教
年	示	友
歸	樹	書
陶	梅	古
氣	歌	會
年	顏	之

德	寒	奉
治	室	年
恐	尊	奔
止	尊	友
慮	對	始
我	得	合
家	得	年

登	淺	春
登	沙	春
發	漢	毫
友	洋	毫
空	無	流
志	其	流
義	異	深
象	矣	深

終